

# 遺伝病検査

イヌでは、多くの遺伝病が報告されています。遺伝子検査は遺伝病の原因遺伝子の変異の有無を検出するため、遺伝病の診断の一助となります。また、遺伝子変異を持つ個体を特定することは、遺伝病の蔓延防止につながります。

## 遺伝病検査一覧

| 遺伝病              | 犬種  | 病気の概要   |
|------------------|---|---|
| 運動誘発性虚脱 (EIC)    | ラブラドル・レトリバー   | 運動誘発性虚脱は、激しい運動(フリスビーキャッチやボールキャッチ)などにより筋肉が虚脱し、起立困難に陥ります(自転車での散歩など、ジョギング程度は問題ないとされています)。致死性の疾患ではないため、安静にすることで症状は改善します。好犬犬種で発症のリスクを知ることは、発症した場合に冷静に対処することができます。                        |
| コリー眼異常 (コリーアイ)   | ボーダー・コリー、<br>シェットランド・シープドッグ、<br>コリー、<br>オーストラリアン・シェパード  | コリー眼異常は、脈絡膜の発育不全が原因の遺伝性眼疾患です。症状は、軽度なものから失明に至るものまで様々です。診断の補助的な検査として有用です。   |
| 進行性網膜萎縮症 (PRA)   | ミニチュア・ダックス・フンド、<br>ゴールデン・レトリバー、<br>イングリッシュ・コッカスパニエル、<br>アメリカン・コッカスパニエル、<br>トイ・プードル、<br>ミニチュア・プードル | 網膜が変性退化し萎縮し続ける遺伝性の眼疾患です。症状は、夜盲症に始まり、次第に視力が低下し最終的には失明に至る疾患です。診断の補助的な検査として有用です。   |
| セロイドリポフスチン症 (CL) | ボーダー・コリー、<br>イングリッシュ・セッター   | セロイドリポフスチン症は、運動障害・知的障害・視力障害などを起こす遺伝性神経変性疾患です。細胞内の老廃物であるセロイドリポフスチンが分解されず、細胞内に蓄積し、細胞に障害を起こします。特に神経細胞が障害されるため、運動障害などが起こります。  |
| 変性性脊髄症 (DM)      | ウェルシュ・コーギー  | 変性性脊髄症(DM)は、脊髄変性が原因により四肢の運動障害が起こる疾患です。病態初期には後肢に症状が現れ、歩行時のふらつきや起立時の後肢の開脚などが認められます。病中期には、後肢を引きずって歩行するようになり、前肢に症状が出現すると歩行困難に陥ります。病後期には呼吸器障害が出現します。DMでは、これらの変化が痛みを伴わずに数年かけて進行することが特徴です。 |

## Q&A

**Q：遺伝子変異が認められたら、確定診断できますか？**

A: 遺伝子変異の存在だけでは確定できません。その疾患を疑う臨床症状があり、且つ遺伝子に変異が認められた場合には、その疾患の可能性が非常に高いと判断できます。

**Q：遺伝子変異が認められなかった場合には、発症の可能性は0%ですか？**

A: 0%ではありません。遺伝子検査では、それぞれ遺伝病の発症と深く関わる遺伝子の変異を検出します。しかし、遺伝子に変異がなくても発症する個体が存在します。これは、発症には遺伝子の変異だけでなく、環境要因などが深く関わっている可能性、さらに未知の遺伝子変異が関わっている可能性などが考えられます。したがって、変異が検出されない場合には、「発症の可能性は低い、0%とは言えない」というのが現状です。

**Q：遺伝病には治療法がありますか？**

A: 残念ながら、遺伝病には根本的な治療法がありません。したがって、適切なブリーディングにより蔓延を防ぐことが最大の対策となります。